

# オーロラ

2007(平成19)年1月21日鑑賞(OS名画座)



監督・脚本＝ニルス・タヴェルニエ／出演＝マルゴ・シャトリエ／ニコラ・ル・リッシュ／アントニー・ムノ／キャロル・ブーケ／フランソワ・ベルレアン／ティボー・ド・モンタランベール／カデル・ベラルビ／竹井豊／ヤン・ブリダール（ギャガ・コミュニケーションズ配給／2006年フランス映画／96分）

……本来はおとぎ話だが、王国の財政危機、政略結婚のための舞踏会、王国乗っ取りの企みなどの「社会性」とオーロラ姫と画家との純愛を両立させたストーリーは見どころいっぱい。「バレエは舞台で」とこだわる必要は全くない。なぜなら、映画なら特等席で美しく魅力いっぱいのオーロラ姫の踊りを堪能することができるから……。日々雑用で疲れた頭を休め、純真な気持ちに戻るには、こんな映画が1番だが……。

## 舞台もいいけど、映画でも……

演奏会やミュージカルそしてバレエは舞台でなくっちゃと思っている人が多いかもしれないが、昔からミュージカル映画大好き人間の私は映画で十分だと思っている……。先日観た『合唱ができるまで』（04年）や『敬愛なるベートーヴェン』（06年）などの音楽モノ映画は十分感動できるし、バレエだって、映画になればベストの位置でその美しさとテクニックを十分堪能できる。舞台は何日も前にチケットを買って席をおさえておかなければならないが、その点映画は気楽。パッと思いついて自転車に乗れば、そこは既に「オーロラ姫」の特等席……。

## オーロラ姫への抜擢は15歳の時

この映画は、17世紀の大陸王「ルイ14世」の時代に設立された王立舞踊アカデミーを前身とするパリ・オペラ座の全面協力によって完成したもの。その伏線と

しては、ニルス・タヴェルニエ監督がパリ・オペラ座のダンサーたちの肉声を集めた長編ドキュメント『エトワール』（00年）の大成功があったとのこと。

『オーロラ』の成否は、9割以上オーロラ姫にどんな魅力的なバレリーナ（ダンサー、女優）を起用するかにかかっているが、ニルス・タヴェルニエ監督が抜擢したのは、当時15歳で、パリ・オペラ座のバレエ学校の学生だったマルゴ・シャトリエ。ニルス・タヴェルニエ監督がオーロラ姫役に要求したのは、「バレリーナとして素晴らしいことはもちろん、美しい少女であることが絶対でした」とのこと。もっとも、「モデルみたいに完璧な女性を求めていたわけではなく、妖精のようでありながら、地に足のついた女性であることが大事でした」とインタビューに答えているから、彼女はまさに監督の要求どおりの理想の女性。もっとも、学生からパリ・オペラ座へ入れるのは学年で1人の時もあるらしいから、2007年に卒業したはず（？）の彼女は、今は無事パリ・オペラ座の団員に……？

## オーロラ姫の物語には社会性と普遍性が……

一般的にバレエの物語は複雑ではなくシンプルなものが多いが、オーロラ姫の物語には社会性と普遍性がある。以下、それを4点にわたって解説しよう。

まず第1は、王国の財政事情の悪化問題。オーロラ姫の父親である国王（フランソワ・ベルレアン）に対する側近（ティボー・ド・モンタランベール）の報告によると、「干ばつと洪水のせいで国は破産寸前」とのこと。しかし考えてみれば、これは公共事業と税金の無駄遣いのせいで、国債が膨れ上がり、国家財政は破産寸前という日本国も全く同じ。決して他人ゴトと考えてはダメ……。

第2は、赤字財政立て直しのための方策として、増税あるいは戦争による他国への侵略という選択肢が提示されたこと。これは賢明なる王の判断によって排斥されたが、王の心が濁ってくるといつでもその危険があるのだから、これも大いに社会性と普遍性のある問題……。

第3は、政略結婚の是非。政略結婚と言うとマイナスイメージが強いが、日本では戦国時代・徳川時代はいわばこれが常識だし、今でもそれに近いケースはいくらでもあるはず。そのうえ、この物語のように3度まで開催可能なお見合いパーティーと考えれば、多分これが最も妥当な王国の財政問題の解決法。それによ

って2人の間に愛が生まれ、結婚に至り、両国の友好と赤字財政の改善が実現できれば、まさに理想的……。そのことは、王妃（キャロル・ブーケ）がそのための舞踏会の開催を単純に喜んでいた姿を見ても明らか。もっとも、王は国の借金減らしと娘の愛のどちらを優先するのかについて悩んでいたようだが……。

第4は、側近による王妃の毒殺。さらに軍との結託によるクーデターという生々しい(?)権力抗争の姿が描かれるところ。バレエの美しさを堪能するだけでなく、こんな社会的な視点もお忘れなく……。

### 王が踊りを禁止したのはなぜ……？

オーロラ姫の物語が面白いのは、バレエ劇でありながら、王から踊りを禁じられたオーロラ姫というパラドックスな設定をしていること……。したがって映画の冒頭、庭で踊る美しいオーロラ姫の姿が登場するが、その観客は弟のソラル（アントニー・ムノ）ただ1人。そして、城の中から望遠鏡でその姿をチェックしていた王は、直ちに娘の踊りを禁止させるべく命令を……。ところが、王が望み望まれて結婚した王妃も、元は国1番の踊り子だった……。そこで問題は、なぜ王が娘に大好きな踊りを禁止したのかということだが……？

ニルス・タヴェルニエ監督のインタビューによると、「グレース・ケリーはモナコ公妃となって、女優をあきらめた」ことにヒントを得ているとのこと。つまり、オーロラ姫の母親である王妃も、家庭に入り、母となることによって、自己実現のための踊りをあきらめざるをえないのだということ。したがって、この映画は、「女性にとって自由とは何かを語る」という大きな意義を持つもの……？

### 3つの王国の踊りをじっくりと堪能

オーロラ姫がデビューする舞踏会の開催限度は、財政上の事情により3度まで。それが前提だが、1度目の見合いで決定すればそんな心配は解消されるのも当然。

この映画が面白いのは、各国の踊りによって求婚の意思を示そうとしたこと。したがって、観客は、多分①アブダラ王国、②ジパング王国、③ヌシャトー王国という3つの王国それぞれの特徴あるエキゾチックかつエロティックな踊りを堪能できる。ちなみに、2番目のジパング王国の王子はその名のとおり日本人だが、

その踊りは不気味すぎてオーロラ姫に不評だったのが少しシャク……？

## 画家の魅力がイマイチ……？

お見合いのためには見合い写真が不可欠なのと同じように、事実上オーロラ姫の結婚相手を決定するための舞踏会のためには、オーロラ姫の見合い写真が必要。そこでとられた処置は、画家にオーロラ姫の肖像画を描かせること。ところが、ここで問題が勃発した。それはつまり、画家がオーロラ姫の美しさに心を奪われたばかりか、オーロラ姫もこの画家に惹かれていったこと。

ちなみに、この画家を演じるニコラ・ル・リッシュはパリ・オペラ座バレエ団員最高位であるエトワールの肩書き（ちなみに、ネット情報によると、英語のプリンシパルは、英語圏で主役を踊る最高位のダンサーのこと。そして有名なプリマ・バレリーナは、イタリア語で主役を専門に踊る女性ダンサーの呼び名とのこと）を持っているから、踊りの技術はピカイチ。しかし残念ながら、私にはその顔はあまりハンサムとは思えない。したがって、なぜオーロラ姫が3人の王子たちには目を向けず、画家一筋に心が動いていったのかが、よく理解できないことに……。さて、あなたのご意見は……？

## おとぎ話には妖精が不可欠……

いくら社会性・普遍性があるといっても、所詮この物語はおとぎ話。そして、『ピーターパン』の物語などと同じく、おとぎ話には妖精が不可欠。このオーロラ姫の物語に登場する妖精は、オーロラ姫を雲の上に案内し、今は処刑によって死亡してしまった画家と踊らせたり、側近の王国乗っ取りの陰謀を教えたりとオーロラ姫に対して親切にしてくれた。それはこの妖精はもともとオーロラ姫が助けた鳥だったから……。

もっとも妖精の言葉によると、雲の上に行けるのは3回が限度とのこと。そこでさてオーロラ姫は、亡き王妃が残した「悲しい時も踊りを忘れないで……」「ソラルが大人になるまで守ってあげて」との遺言を、どのように守り、実現していくのだろうか……？

2007(平成19)年1月23日記